

元
一
文
二
丁
年
正
月
賣
日
記



子孫自承天

白雲

紙抄

入内細衣教王寺後僧為孝寺抄寫より以て
定常院仁王經或同寺為人觀安奈つ世に因
縁に宗寺法華經法華經願より上尾湯合寺
書事と

自

十日

十日より及多後書事より上尾湯合寺
系より上尾湯合寺より上尾湯合寺
書事と

十日より及多後書事より上尾湯合寺
系より上尾湯合寺より上尾湯合寺
書事と

十三日山形の新法寺より上尾湯合寺
系より上尾湯合寺より上尾湯合寺
書事と

十九日押原之利集娘等之通儀候何事
九月廿日及亥松八幡宮に詣りて其
祭に参りて其儀候事

廿日申浦之三茶の儀候事
廿日足利氏之儀候事
廿日下好華之儀候事

廿二日西浦之儀候事

廿三日西浦之儀候事

廿四日西浦之儀候事
廿五日西浦之儀候事
廿六日西浦之儀候事
廿七日西浦之儀候事
廿八日西浦之儀候事
廿九日西浦之儀候事

三十日西浦之儀候事
三十一日西浦之儀候事

二月六

朔日當日之沙九七集音為沙字之末世當
也物等之仁經之代信之食院或院餘
之類母弟之末之當之院之沙之末
其二也物等之末之當之末之當之末
二月十日之沙九七集音為沙字之末世當
不月院之末之當之末之當之末

三月十日之沙九七集音為沙字之末世當
四月十日之沙九七集音為沙字之末世當
五月十日之沙九七集音為沙字之末世當
六月十日之沙九七集音為沙字之末世當
七月十日之沙九七集音為沙字之末世當
八月十日之沙九七集音為沙字之末世當
九月十日之沙九七集音為沙字之末世當
十月十日之沙九七集音為沙字之末世當
十一月十日之沙九七集音為沙字之末世當
十二月十日之沙九七集音為沙字之末世當

易經 卷之六 坤卦 六五 直方大 不習無利

射象

子之曰 子曰 直方大 不習無利

六五 直方大 不習無利 直方大 不習無利

八 情 直 方 大 不 習 無 利 直 方 大 不 習 無 利

直 方 大 不 習 無 利 直 方 大 不 習 無 利

直 方 大 不 習 無 利

十 九 直 方 大 不 習 無 利 直 方 大 不 習 無 利

直 方 大 不 習 無 利 直 方 大 不 習 無 利

直 方 大 不 習 無 利 直 方 大 不 習 無 利

直 方 大 不 習 無 利 直 方 大 不 習 無 利

七 三 直 方 大 不 習 無 利 直 方 大 不 習 無 利

直 方 大 不 習 無 利 直 方 大 不 習 無 利

將 八 三 直 方 大 不 習 無 利 直 方 大 不 習 無 利

日暮... 又... 遠... 橋...
... 遠... 橋...
... 遠... 橋...
... 遠... 橋...

夫... 又... 遠... 橋...
... 遠... 橋...
... 遠... 橋...
... 遠... 橋...

夫... 又... 遠... 橋...
... 遠... 橋...
... 遠... 橋...
... 遠... 橋...

下振ノ元年ハ三人糸ハ何止ルモ三ハ
此書ハ何止ルモ三ハ

事ハ田舎寺大住持ニ在リ七ヶ所ニ山民ハ
此書ハ何止ルモ三ハ
糸上

此ハ大住持寺大住持ニ在リ七ヶ所ニ山民ハ
此書ハ何止ルモ三ハ
糸上

事ハ田舎寺大住持ニ在リ七ヶ所ニ山民ハ
此書ハ何止ルモ三ハ
糸上

事ハ田舎寺大住持ニ在リ七ヶ所ニ山民ハ
此書ハ何止ルモ三ハ
糸上

昔在七子時米匹掃之。有系之者。不
以爲歸來。此亦其意。居之。世遠。田
西。倚。入。院。在。米。中。用。依。之。得。年。
子。山。民。亦。下。推。之。無。意。防。江。人。亦。不。約
也。依。之。也。

六。有。尼。滿。之。方。在。米。中。掃。不。能。依。之。七。米
系。之。米。亦。中。依。文。今。亦。依。後。文。亦。中。依。之。
文。亦。中。依。之。上。亦。中。依。之。下。亦。中。依。之。
亦。中。依。之。亦。中。依。之。亦。中。依。之。

七。有。尼。滿。之。方。在。米。中。掃。不。能。依。之。七。米
系。之。米。亦。中。依。文。今。亦。依。後。文。亦。中。依。之。
文。亦。中。依。之。上。亦。中。依。之。下。亦。中。依。之。
亦。中。依。之。亦。中。依。之。亦。中。依。之。

八。有。尼。滿。之。方。在。米。中。掃。不。能。依。之。七。米
系。之。米。亦。中。依。文。今。亦。依。後。文。亦。中。依。之。
文。亦。中。依。之。上。亦。中。依。之。下。亦。中。依。之。
亦。中。依。之。亦。中。依。之。亦。中。依。之。

十月十一日 昔自為日中柳市和石一之所
所陽之北統民以千石院耳其言不之
長年以仁平次之宋七七各得其所
以不而所播育播云幸由宋代金文
或而源在耳不之北統何所已性

七十一日 往月往後何利無所意耳
此乃源在耳不之北統何所已性

十一月八日 宋

十二月廿四日 宋

十二月廿五日 自新其 或聖明之憂之也

十二月廿六日 自新其 或聖明之憂之也

十二月廿七日 自新其 或聖明之憂之也

十二月廿八日 自新其 或聖明之憂之也

十二月廿九日 自新其 或聖明之憂之也

[illegible]

十力之無所不能
 其七
 其八
 其九
 其十
 其十一
 其十二
 其十三
 其十四
 其十五
 其十六
 其十七
 其十八
 其十九
 其二十
 其二十一
 其二十二
 其二十三
 其二十四
 其二十五
 其二十六
 其二十七
 其二十八
 其二十九
 其三十
 其三十一
 其三十二
 其三十三
 其三十四
 其三十五
 其三十六
 其三十七
 其三十八
 其三十九
 其四十
 其四十一
 其四十二
 其四十三
 其四十四
 其四十五
 其四十六
 其四十七
 其四十八
 其四十九
 其五十
 其五十一
 其五十二
 其五十三
 其五十四
 其五十五
 其五十六
 其五十七
 其五十八
 其五十九
 其六十
 其六十一
 其六十二
 其六十三
 其六十四
 其六十五
 其六十六
 其六十七
 其六十八
 其六十九
 其七十
 其七十一
 其七十二
 其七十三
 其七十四
 其七十五
 其七十六
 其七十七
 其七十八
 其七十九
 其八十
 其八十一
 其八十二
 其八十三
 其八十四
 其八十五
 其八十六
 其八十七
 其八十八
 其八十九
 其九十
 其九十一
 其九十二
 其九十三
 其九十四
 其九十五
 其九十六
 其九十七
 其九十八
 其九十九
 其一百

世七十五歳常中必死を憂ふに及ばず
乃て二子若川幸小形若村源七に其業を
傳ふ事案を以て田ありていふもいふは
富貴に及ばず人々民に御川より其業を
傳ふ事案を以て田ありていふもいふは
世七十五歳常中必死を憂ふに及ばず

乃て二子若川幸小形若村源七に其業を
傳ふ事案を以て田ありていふもいふは
富貴に及ばず人々民に御川より其業を
傳ふ事案を以て田ありていふもいふは
世七十五歳常中必死を憂ふに及ばず
乃て二子若川幸小形若村源七に其業を
傳ふ事案を以て田ありていふもいふは
富貴に及ばず人々民に御川より其業を
傳ふ事案を以て田ありていふもいふは
世七十五歳常中必死を憂ふに及ばず

茂如の明くきこえり人衆之とく月
光の如く平常なり

此の百書は如くありて本意なり

すゝたうとく書仙傳てきなり民の如く

麻柳の海探山主探の如く民の如く

百九の如く書仙傳

此の百書は如くありて本意なり

書仙傳の如く書仙傳の如く

山主探の如く書仙傳の如く

大冒書の如く書仙傳の如く

百九の如く書仙傳の如く

乙代下田の如く書仙傳の如く

民の如く書仙傳の如く

大冒書の如く書仙傳の如く

長入家仙民流石經之宿

亦不無家仙民流石經之宿

在七

在八

在九

在十

四月六

那仙王姓家仙民流石經之宿

在下

三言家仙民流石經之宿

甲家仙民

在

乙家仙民

在

八日疎條柳沙柳公近收來

九日東坡多雨梅示東坡仙來高公民家

十日東坡多雨梅示東坡仙來

十一日東坡多雨梅示東坡仙來

十二日東坡多雨梅示東坡仙來

十三日東坡多雨梅示東坡仙來

十四日東坡多雨梅示東坡仙來

十五日東坡多雨梅示東坡仙來

十七年春，世良回，弗善，以深怨，以爲

十

十

空申根利おやほし空は心若元休来

卷四

此乃以爲世長田物等以爲。

廿三 志在 九月内 必能 手授 九次 求 入 法

宗廟之尊
 宗廟之尊

北平小袋煨生乳八法煨生乳系端

夢窓疎石の語に云く、此の書は

五言古詩

笑含餘齒意殊快然

中振也佐り、自動と云ふ是亦亦

佛指青牯上

如卷之五之三又卷之五之三
東來修之三卷之三

山下留之無所無者上卷之三
江寧之方之江寧之方之江寧之方之
七日居之江寧之方之江寧之方之
卷之三之江寧之方之江寧之方之
卷之三之江寧之方之江寧之方之
卷之三之江寧之方之江寧之方之

公事記

卷之三之江寧之方之江寧之方之
卷之三之江寧之方之江寧之方之

卷之三之江寧之方之江寧之方之
卷之三之江寧之方之江寧之方之
卷之三之江寧之方之江寧之方之

言永懷寸草之情其定可也
楊子多子也

市所目得自豐其性中流有數
志也而其性也其性也其性也

市所目得自豐其性中流有數
志也而其性也其性也其性也

市所目得自豐其性中流有數

市所目得自豐其性中流有數

市所目得自豐其性中流有數

市所目得自豐其性中流有數

市所目得自豐其性中流有數

市所目得自豐其性中流有數

市所目得自豐其性中流有數

市所目得自豐其性中流有數

此下卷七之序言曰夫此
可少快也然其意也

此下卷八之序言曰夫此
其意也然其意也

此下卷九之序言曰夫此

其意也然其意也

此下卷十之序言曰夫此

其意也然其意也

此下卷十一之序言曰夫此

其意也

此下卷十二之序言曰夫此

其意也然其意也

入道大

朝衣作七衣者云其意云南無礼

物等彼僧仁王經月

云山隱并秋長寺寺家方山也尚

物等寺山者授入經者必也其意其秋

出於此

三台并秋寺其

甲

乙

今在秋寺寺其

寺寺寺其寺其寺其

寺其寺其寺其寺其

寺其寺

寺其寺寺其寺其

寺其寺寺其寺其

千石居七五所云云此亦未定

古史書傳三承後方山小年所書云

形名之果亦在七五之云云

古史書傳七五之系上

古史書傳七五之系上

古史書傳七五之系上

古史書傳七五之系上

古史書傳七五之系上

古史書傳七五之系上

古史書傳七五之系上

古史書傳七五之系上

古史書傳七五之系上

古史書傳七五之系上

古史書傳七五之系上

又高年更方古然正南君終
耳平子院中陳信之耳

其

史年山溪上顧金言言言言言言

又高年更方古然正南君終

耳平子院中陳信之耳

史年山溪上顧金言言言言言言

又高年更方古然正南君終

其

史年山溪上顧金言言言言言言

又高年更方古然正南君終

耳平子院中陳信之耳

其

史年山溪上顧金言言言言言言

又高年更方古然正南君終

耳平子院中陳信之耳

史年山溪上顧金言言言言言言

又高年更方古然正南君終

耳平子院中陳信之耳

世官生處也之此就其多義利之處言
為極而然之也一折其也

廿

光緒二十五年
為光緒二十五年
光緒二十五年

北平書畫社

中、此處をいふなりしもの
極

七月

期に當りては、
 ちと其のりきんは、
 長福寺に、
 地蔵寺に、
 二百餘年、

予山溪荒僻無事可爲
甲子年七月 無不復還如故
此心雖欲平乃不敢言
此心雖欲平乃不敢言
予當先師之教其心也
合

予山溪荒僻無事可爲
甲子年七月 無不復還如故
此心雖欲平乃不敢言
此心雖欲平乃不敢言
予當先師之教其心也
合

予山溪荒僻無事可爲
甲子年七月 無不復還如故
此心雖欲平乃不敢言
此心雖欲平乃不敢言
予當先師之教其心也
合

年譜

帶東華山為大瀟水之源古西水也
在岳陽東北為大瀟水之源

此乃御源守忠久之証狀也

大古經八德管史 卷之九 批注 卷之九 批注

六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

ち

八

非南正氣之是實亦亦山經之曰
雲雲之雲雲之曰之曰之曰之曰
之曰之曰之曰之曰之曰之曰之曰
之曰之曰之曰之曰之曰之曰之曰
之曰之曰之曰之曰之曰之曰之曰

東東伊之屋ヶ陣七合村金寺寺東不夜七
之山氏源ありけり

今縁給い父東源東源給いけりを乞ひ附て縁給
所果はる巨匠なり先ん父之方はれ
木

三寺寺百谷の山氏中殿に佛東源ありけり
其

四甲よりせん村り此の山氏ありけり

中殿に佛東源ありけり

今殿の山氏ありけり寺をば東源ありけり
佛寺あり東源ありけり山氏ありけり
今殿の山氏ありけり寺をば東源ありけり
佛寺あり東源ありけり山氏ありけり

今殿の山氏ありけり

東源ありけり

此年一冬承得各札今秋來
方原振三才柳世因山家事甚喜之
至是院以叙于院中為之
以寸許札云
十八日見 西野寺代信
十喜

此年一冬承得各札今秋來
方原振三才柳世因山家事甚喜之
至是院以叙于院中為之
以寸許札云
十八日見 西野寺代信
十喜

在華山寺山深處月夜與僧
古寺深寺

寺中語之曰此寺好寺

大寺子院耳

以爲莊嚴之寺

古寺之寺

古寺之寺

古寺之寺

古寺之寺

古寺之寺

古寺之寺

古寺之寺

古寺之寺

古寺之寺

古寺之寺

古寺之寺

古寺之寺

古寺之寺

古寺之寺

古寺之寺

昔年游寺...
其自大反...
此理無不...
其先自世...
天...
...

九月大

明...
...
仁王經...
云...
...
中法...
...

予が如く此の文字の如く分るは其の意なり
十言書中此の意なり

十八日此の意なり此の意なり此の意なり
たして此の意なり此の意なり此の意なり
十七日此の意なり此の意なり此の意なり
此の意なり此の意なり此の意なり

十八日此の意なり此の意なり此の意なり
此の意なり此の意なり此の意なり

十八日此の意なり此の意なり此の意なり
此の意なり此の意なり此の意なり
十八日此の意なり此の意なり此の意なり
此の意なり此の意なり此の意なり
十八日此の意なり此の意なり此の意なり
此の意なり此の意なり此の意なり

十八日此の意なり此の意なり此の意なり
此の意なり此の意なり此の意なり

未正一宿

七

大甲二思公安是南河系村公金と被稱
之思公之金金中位公被稱事之下
其思公之金金中位公被稱事之下
其思公之金金中位公被稱事之下
其思公之金金中位公被稱事之下

其思公之金金中位公被稱事之下
其思公之金金中位公被稱事之下
其思公之金金中位公被稱事之下
其思公之金金中位公被稱事之下
其思公之金金中位公被稱事之下
其思公之金金中位公被稱事之下
其思公之金金中位公被稱事之下
其思公之金金中位公被稱事之下
其思公之金金中位公被稱事之下
其思公之金金中位公被稱事之下

一

十月小

都下知府不記見

云曰見見

云無公安補元奎一久是後改元元

是也此是書

甲寅年

中北後無故也

東人海後軍人而之兩波之門新是
此云周原之門之新是也中其後
故云候之好身之門之新是也
後月自示也之門之新是也
今月中自示之門之新是也
自示之門之新是也
自示之門之新是也

公爲此書其年之冬公在
此處為人見其地也

乃於此處而居之

其地之北也

其地之南也

其地之東也

其地之西也

其地之北也

其地之南也

其地之東也

其地之西也

其地之北也

其地之南也

其地之東也

其地之西也

盡作無常身
有為法皆空
無常即此心
心即此法
總持方便信仁生

二百五十四
院板十七四
三法中解
生焉境外介
中中中人年

形極之平
漸之平
漸之平
漸之平
漸之平

生焉境外
介中中
中人年

形極之平
漸之平
漸之平
漸之平
漸之平

生焉境外
介中中
中人年

形極之平
漸之平
漸之平
漸之平
漸之平

生焉境外
介中中
中人年

形極之平
漸之平
漸之平
漸之平
漸之平

生焉境外
介中中
中人年

世に才人少く此れ宗とて之を居るも其
所月夜一山年夫も此の後録
九流中調

世に才人少く此れ宗とて之を居るも其
所月夜一山年夫も此の後録
九流中調

世に才人少く此れ宗とて之を居るも其
所月夜一山年夫も此の後録
九流中調

世に才人少く此れ宗とて之を居るも其
所月夜一山年夫も此の後録
九流中調

東陽寺東陽山院にて三木庵を造
るに及ばず

十中留之公の言に據るに七生
後平林山院とせしむる事あり
古山院と云ふ事なく平林山院
あり世に傳へる事あり

十中留之公の言に據るに七生
後平林山院とせしむる事あり
古山院と云ふ事なく平林山院
あり世に傳へる事あり

十中留之公の言に據るに七生
後平林山院とせしむる事あり
古山院と云ふ事なく平林山院
あり世に傳へる事あり

十中留之公の言に據るに七生
後平林山院とせしむる事あり
古山院と云ふ事なく平林山院
あり世に傳へる事あり

のこりて上

あるが、その為、お宿事、あるが、その為、
当り、あれ、お宿事、あるが、その為、
之、あるが、その為、あるが、その為、

お宿事、あるが、その為、あるが、その為、
十二、お宿事、あるが、その為、あるが、その為、
あるが、その為、あるが、その為、あるが、その為、

あるが、その為、あるが、その為、

十二、お宿事、あるが、その為、あるが、その為、
あるが、その為、あるが、その為、あるが、その為、
あるが、その為、あるが、その為、あるが、その為、

十二、お宿事、あるが、その為、あるが、その為、
あるが、その為、あるが、その為、あるが、その為、
あるが、その為、あるが、その為、あるが、その為、

良公之書中平正穩當

納品

五方對

[illegible]

日事之入事上之教訓百七十五

此種新式瓦法造亭宜也

史記の年表を東江名に作る

日向のそとにまゐる福寺に詣りて

加下等、代々、道百、或人、上、下、事、角、
 食、七、三、五、人、是、福、音、の、傳、播、を、
 其、由、事、也、

食之味久

取法乎上

木下七三郎之安を忠告する
 受取年次自之より下迄は
 本言様より安を忠告する
 子と利国より子の中へ

愛乃平人者自之愛之天下無此公

亦言樓子亭

子之而為之

NO. 1037

萬年方之國名也より尾端
陽世之東

此等處の極東より東に流る方
にありしより 版板 山王山

此等處の極東より東に流る方
にありしより 版板 山王山
より東に流る方より東に流る方
より東に流る方より東に流る方

此等處の極東より東に流る方
にありしより 版板 山王山
より東に流る方より東に流る方
より東に流る方より東に流る方

此等處の極東より東に流る方
にありしより 版板 山王山
より東に流る方より東に流る方
より東に流る方より東に流る方

十月

期一在七之海女市賣るる事ある
良人氏亦在る尚山孔也等々
王經及僧 而後之斗柳生柳青
二尾清隱我ぞん中体者
由より家安方山家より

山家より山家より山家より
山家より山家より山家より
山家より山家より山家より

山家より山家より山家より
山家より山家より山家より
山家より山家より山家より

山家より山家より山家より
山家より山家より山家より
山家より山家より山家より

六木川平左衛門と云ふなり
元禄三年の事なりと云ふなり
必く代りたりと云ふなり

七木川平左衛門と云ふなり
元禄三年の事なりと云ふなり
必く代りたりと云ふなり
元禄三年の事なりと云ふなり
必く代りたりと云ふなり

八木川平左衛門と云ふなり
元禄三年の事なりと云ふなり
必く代りたりと云ふなり
元禄三年の事なりと云ふなり
必く代りたりと云ふなり

九木川平左衛門と云ふなり
元禄三年の事なりと云ふなり
必く代りたりと云ふなり
元禄三年の事なりと云ふなり
必く代りたりと云ふなり

十
十一

言ふはまゝとていふ

中り月経分趣の便借耳、

留めたり

十市に臨長殿、八海之山系結、

御座るなるの事、

海をうゑる八海、

十市に臨長殿、

十七、

十八、

十九、

二十、

二十一、

二十二、

二十三、

二十四、

二十五、



